

# てこな・ミュージック・ジャーナル

## 21世紀の天才

### ピアニストが語る天才

音楽史に残るピアニストというと誰だろうと時々思うことがあります。日本人で言えば、内田光子と多くの方がその名を上げてください。では来日する演奏家とすると、アルゲリッチでしょうか。そんなことを考えながら、目の前にある一冊の本を手に取りました。

書き手は、自身ピアニストであり文筆家として評論家として大変な活躍をしている青柳いづみ子さんです。本の題は「ピアニストが見たピアニスト」。そこに取り上げられているリヒテル、アルゲリッチについて、その天才ぶりの一端を今回はご紹介しましょう。

### リヒテル 椅子は高く

まずはリヒテルから。1915年ロシア生まれのリヒテルは正式な音楽教育を受けていません。最初に弾いたのはショパンのノクターンとベートーヴェンのテンペストだったそうです。22歳で初めてモスクワ音楽院のネイガウスに弟子入りしましたが、「ベートーヴェンのピアノソナタ作品110は勉強するように」ということと、演奏会用の椅子は高くとだけ言われたそうです。高い位置に手があるように、すなわち「宙」で演奏するためだそうです。

### 30数えて演奏開始

リヒテルの面白いエピソードというと、弾き始めるタイミングでした。例えばリストのソナタは椅子に座って、まず30数えてから弾き始め、そしてベートーヴェンのソナタは椅子に座るとすぐに弾き始めたそうです。どちらの場合も聴衆にとっては居心地がよくないかもしれませんが、リヒテルがまさか心の中で30数えているなんて想像もつきませんから。または演奏する前に心の準備を整えるのがリヒテルと思い込んでいると、ベートーヴェンでは座るや否や鍵盤に指が走り出すのですから。

私が好きなリヒテルの曲はシューマンの「子供の情景」です。大人のシューマンが子供の心を歌う、詩人シューマンの密やかな心の声が聞こえてくるようで、椅子を高くして手の重みで鍵盤をつぶさないように、弱音のバランスに長けた素晴らしい演奏です。

市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

### アルゲリッチ ぶっつけ本番

青柳さんが取り上げている天才の中で現在もなお、演奏家として教育者として世界でもっとも注目される人と言えばアルゲリッチでしょう。表現はおかしいのですが、まさに「尋常ならざる」天才振りです。リヒテルと大きく異なるのは、練習嫌い、譜読みが異常に速いということです。

1941年アルゼンチン生まれのアルゲリッチは恋多き女性としても有名ですが、夫となった1人はNHK交響楽団指揮者のデュトワです。結婚する前、ローザヌ管弦楽団の指揮者デュトワからラヴェルの「ピアノ協奏曲」をと頼まれた18歳のアルゲリッチは、本番になるまで第2楽章を決してデュトワの前で演奏しなかったそうです。それは演奏したことがなかったからで、ゲネプロの前日、ピアノの無い寝室で初めての譜読み。そして翌日は大変な速度で熟演して、ファゴット奏者がついていけないので降りたといわれたほどだったとか。

### 神業

16歳の時にエントリーしたブゾーニコンクールでは、第二次予選の課題曲リストの「ハンガリー狂詩曲」を出場が決まって5日で仕上げ、プロコフィエフの協奏曲については、信じがたいことですが、睡眠中に聴いただけで弾けるようになったそうです。

### スピード狂と「けだるさ」

アルゲリッチの演奏テクニックの1つに、いくらでも速く弾けるといふものがあります。オクターヴや和音の連続になると「運動モード」に入ってしまうテンポが上がる、そのため速く弾き過ぎないようにする練習をしなければならない、でも調子が悪いとますます急いでしまう、それがまさに欠点だと青柳さんは書いています。そんなアルゲリッチなので、コンクールでは、ほかの審査員が速く弾きすぎると評価を低くする受験者に対して、「目にも止まらぬ演奏」だと高く評価するという興味深い傾向があるそうです。

速度過剰、この傾向で素晴らしい演奏として私がお勧めしたいのは、ショパンの前奏曲集です。疾走するものはあくまでも速く、激情は駆られすぎて破滅しそうで、静けさの中にも情熱をひた隠している、アルゲリッチによるショパン解釈、本当に感動的です。そして青柳さんお勧めのアルゲリッチはと言うと、しなだれかかると、けだるい、ラヴェルの「高雅で感傷的なワルツ」だそうです。

リヒテルはすでにこの世にいません。青柳さんが描くアルゲリッチを読み進むうちに、今年こそ別府アルゲリッチ音楽祭に行きたくくなりました。果たしてチケットは手に入るでしょうか？